



TITLE:

京都大学瀬戸臨海実験所振興会水族館月報 No. 17

AUTHOR(S):

CITATION:

京都大学瀬戸臨海実験所振興会水族館月報 No. 17. 京都大学瀬戸臨海実験所振興会水族館月報 1954, 17: 55-61

ISSUE DATE:

1954-02-04

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/186865>

RIGHT:

京都大学瀬戸臨海実験所振興会
水族館月報

No. 17

1954. 1月(2月4日)

この月の最大の事故は、海竜温水槽ヒーターの全滅的故障である。先号で已に31日に故障が起り始めた事を記したが、4日更に次々もの及び31日に取換えたものが破損し、漏電のため、仔魚4匹が感電死亡した。原因は工事粗雑のため漏水し、そのため漏電してヒーターが腐蝕又は短絡燃焼したのと思われるが、業者は工事に遺漏のなかつた事を強調している。何しろ、このヒーターは1箇が3,000円近くもする高価なものであるから専門家に原因を探究して貰い、善処する予定である。取敢えず、ヒーター取付の設計を変えて、2日以後は事故なく過しているが、この事故のため約5万円の臨時出費を見なければ痛かつた。又方近く、殊に雨天には、南水槽室の水槽が暗くなって、入場者の不評を招いていたが、やつと蛍光灯14本の設備が19日完了した。この設備には、150ボルトの変圧器が附属しているので、電圧降下の際にも点灯する事が出来る。

中旬迄は暖冬のおかげで、魚族の死亡数も少かったが、以後酷暑に激変したため、少からぬ魚族が死亡した。12月に入つたブリは、6日に死亡してしまつた。25日夜、熱帯魚用のヒーターのヒューズが飛んで、14℃迄水温が降下したところ、忽ち魚が弱つて来て、27日にはツノナシ2匹、30日にはミノカサゴ1匹及び唯1匹え気にしていたアオリイカが死亡した。このように減少した魚の補充も、悪天候と水温が低いために、全然漁獲がなく、こいばらくは見込がない。例年の人気者アカアシガニも、再三連絡はとっているけれども、本年は、未だに採集されない。12月号に記したアカアシガニは、天候が治つたので、受令領に出かけようと連絡したところ、惜しくも死亡役であつた。

博物館に通ずる路と実験所の間の土地を、若干美化し、こゝにベンチと基を据付けた。花壇も縁取りをして、とにかく作栽は整つて来た。

1月に入ってから気がついたのであるが、先月31日の強風のため、博物館屋根の瓦が、またまた吹き飛ばされている。水族館陳列室のガラス屋根も一部破損したが、これは大工さんに来て貰つて簡単に応急修理をした。2日、中水槽裏の淡水鉄管が腐蝕破^裂れて噴水を始めたが、

コンクリートの下であるため、工事がむづかしく、止むなく水族館東側で鉄管を切り、陳列室北側を迂回して配水して貰うようにした。その他、水槽の洩水箇所が多く、その原因も、亀裂、木枠の腐朽等々が重っており、もはや一時押えの小修理が効かない時期に達しているため、はるまじいかと案じられる。

かねての懸案であつた水族館員の共済組合への加入が、やっと具体化して、県の厚生課及び、県下教育施設団体の共済組合に正式加入を先月申込み、いよいよこれが発効する事となつた。従つて、毎月の厚生費が増額される点を御了承願ひたい。博物館を手伝つて貰つていた時岡美津子嬢は、家庭のやむなき事情のため、10月31日を以て職を辞した。適当な後任者があるまで、先に水族館陳列室出口の番として貰つた事がある左海の子嬢の労を換わす事とした。この月、学術資料の戸棚から、*Goniastrea* (中之島産) の小さい標本が盗難にあつた。誠に歎かわしい限りである。

⑤ 1月の入場者数

水族館発売切符数

大人 3467

小人 397

団体 2511

明光バス発売切符数

大人 10232

小人 251

無料入場者

計 6395

計 10483

合計 16878

(累計 171367)

(累計 1520)

⑥ 1月の収入

(累計)

観覧券売上金 322,566.00 3,052,154.00

雑収入 260.00 89,058.00

12月よりの繰越し 31,463.00

計 354,291.00

⑦ 1月の支出

一般経費

費目別	金額	累計	備考
人件費	42,600.00	489,748.00	
光熱費	13,084.00	81,657.00	
消耗品費	1,219.00	29,338.00	
備品費	1,276.00	17,715.00	
修理費	24,566.00	159,665.00	

材料費	5,085.00	111,030.00
厚生費	2,685.00	7,540.00
旅費	—	970.00
諸税公課	—	48,743.00
雑費	270.00	14,282.50
通信運搬費	1,310.00	15,882.50
契約金	—	115,300.00
合計	97,419.00	1,141,799.00

水族館設備改善費

項目	金額	累計	備考
便所建築費	—	170,480.00	
電話室設備	—	3,565.00	
花壇設置	—	6,450.00	
博覧館前広場 芝生園リエ工	—	36,575.00	
オサガノ裸子 博覧館前広場	—	40,000.00	
水標棚設置	—	21,500.00	
博覧館前広場 水標工	—	12,160.00	
立札ベンチ	5,980.00	14,880.00	
No.22水標棚 博覧館前広場	—	50,738.00	
蛍光灯及自動 ボルト工	43,324.00	43,324.00	
合計	49,304.00	400,682.00	

実験所改善費

費目別	金額	累計	備考
人件費	3,964.00	45,743.00	研究補助 員給與
印刷費	70,000.00	370,000.00	
備品費	—	173,100.00	
設備修理費	5,980.00	89,867.00	
特別費	—	50,000.00	
合計	79,944.00	728,710.00	

博物館費

費目別	金額	累計	備考
人件費	5,550.50	57,525.00	
備品費	2,400.00	38,493.00	標本 材料
修理費	—	15,253.00	
消耗品費	500.00	3,111.00	

旅 費	—	240.00	
通信運搬費	—	40.00	
合 計	8,450.00	111,192.00	

積立金

費 目 別	金 額	引 出 高	現 在 高	備 考
バス・ツツ資金	7,000.00	—	93,000.00	
賞与資金	1,000.00	—	21,034.00	
厚生資金	1,500.00	—	7,852.00	
災害時予備金	—	10,000.00	81,326.50	南氏に10,000-貸付
会議費積立金	—	—	40,000.00	
水族館借入料積立金	—	—	—	
特別予備金	53,700.00	—	277,210.00	
合 計	19,200.00	10,000.00	520,422.50	

支出合計

一般経費	97,419.00
水族館設備改善費	49,304.00
実験所改善費	79,946.00
博物館費	8,450.00
積立金	69,200.00

計 304,319.00

2月に繰越(54,972.00 (周辺美化に要した費用 5730,000-の支拂金を含む))

① 1月の気象

	上 旬	中 旬	下 旬
晴天日数(20)	7	4	9
気 温	7.7—16.0 11.8	9.4—13.9 12.2	1.3—12.6 9.2
水 温	13.0—16.3 15.1	14.6—15.8 15.2	12.1—15.4 13.5

② 1月の魚

No.28温水槽には、今なお ツバシ 1、アマミ 1、スザラシ 2、キハツ 2、アミモグラ 5 が生存している。隣のNo.27水槽には ミノカサゴ 2、マキベラ 1 が生存している。この2水槽と、エビスダイ とが人の注目を惹いている。

1日……ブリ(400枚)、アカノハ、カゴカキダイ、夫々1匹死亡。

5日……No.13号水槽に マダコ と テナガダコ を入れておいたところ、3日、

マダコ が テナガダコ に足先を食われて弱り始め、遂に死亡した。仔連の匹ヒーター故障で寒さで死亡。ブリ (ノ賞500枚) 死亡、

網で獲った際の皮膚のズレがゴロイド状になり、それが原因で、この部分を他の魚に突つかれるので、ますます症状が悪化するらしい。腹腔内に多くの吸虫が見られた。

6日……最後の大ブリも死亡。肉を鑑具に分けても、皮膚が汚いのに怖気て、辞退者続出。食べてみたが購入後日も浅いのに脂がすつかり落ちていた。以上に怒りて、今後は網で獲ったブリは購入しない事を申し合せた。仔竜更に1匹、寒さのため死亡す。

8日……ノ真々00次のアオブダイがツボ網で獲れて持込まれたが、腹中の空気が抜けず、タ方死亡した。吻端——尾ビレ先端が6cm 高さ12cm に達する大きなカヨカキダイが1匹獲れた。残念にもこれは10日に死亡した。一般にツボ網の魚は生きない。

14日……水質に記したイシガキダイは、病状が急に悪転して死亡した。

19日……大きなエビスダイが1匹持込まれる。

21日……エビスダイ更に1匹持込まれる。ツノダシ1匹が獲れた。(これは22日に死亡) アミモンガラ(小型) 1尾形虫して死亡。

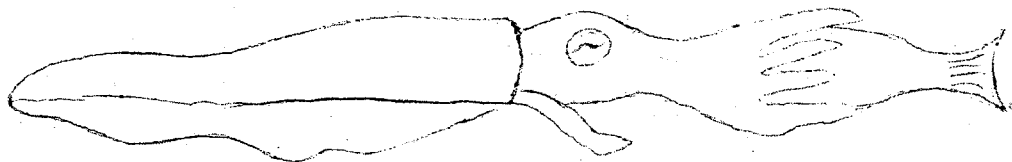
アオリイカの捕餌法……アオリイカにイワシのアシを投げよせたとする。まず眼を輝かせ、体色を仰々しく変えながら餌に近付き、オソカナビツクリの風情にて、伸ばした2本の触手で捕え、すばやく引き寄せると、その途中で必ず魚の頭部が手元にくるように餌を抱いて(もう、

まず



Aの部分から噛みついて、

頭を落して捨てた後、



圖のように、尾を向うにして、肉の露出面から食ひ始め、最後の固い尾部は放り捨て(もう、トビ、カラスを突き出して肉をかいて取る様は、すさまじき跳力である。

21日

◎ 1953年度との比較

	1953	1954
入場者	13166	16075
売上金	253,670.00	322,565.10
支出金	225,050.00	304,319.10